

# 湘南医療大学ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学 薬学部 医療薬学科  
講師 浦 裕之  
(令和8年4月22日 作成)

## 1. 教育の責任

本学では、建学の理念である「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」に基づき、人間の生命や尊厳を理解できる豊かな人間性と「薬学の医療専門職」としての知識・技術を修得して、保健、医療、福祉、教育の幅広い分野で地域の健康増進・公衆衛生を支え、寄与・貢献できる医療人を養成するという教育理念を掲げている。本学薬学部は令和3年度に開設され、卒業生の輩出はこれからとなるが、医療人としての使命感と倫理観、専門的かつ幅広い視座に基づく問題解決に向けた実践力、主体性と相互理解に基づく対話力、生涯にわたる自己研鑽力といった、薬剤師として求められる基本的な資質を学生に修得させ、社会に送り出す責任がある。私は本学薬学部の教員として、担当科目と教育活動を通じ、豊かな人間性の涵養と、生涯を通して主体的に新たな知識・技能を学び続け、国際社会の発展に貢献できる人材の育成を目指す。

### 【学内担当科目】

「早期臨床体験実習」(医療薬学科1年前期)  
「内科学Ⅰ」(リハビリテーション学科2年前期)  
「薬学総合プレ研究」(医療薬学科3年通期)  
「実務実習事前学習Ⅰ」(医療薬学科3年後期)  
「実務実習事前学習Ⅱ」(医療薬学科4年前期)  
「実務実習事前学習Ⅲ」(医療薬学科4年後期)  
「薬物治療学Ⅲ」(医療薬学科4年前期)  
「病院実務実習」(医療薬学科5年通期)※臨地実務実習指導  
「後期臨床体験実習」(医療薬学科5年後期)  
「卒業研究Ⅰ(課題解決型薬学研究・基礎と応用)」(医療薬学科4年後期～5年後期)  
「卒業研究Ⅱ(課題解決型薬学研究・発展)」(医療薬学科6年前期)  
「チーム医療論」(医療薬学科6年後期)  
「薬物治療学Ⅵ」(医療薬学科6年後期)  
「呼吸循環機能学特論」(大学院保健医療学研究科1年前期)  
「呼吸循環機能学演習」(大学院保健医療学研究科1年後期)  
「多職種協働・地域連携特論」(大学院保健医療学研究科1年後期)

### 【学外担当科目】

「臨床薬理学」(茅ヶ崎看護専門学校3年前期)

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

私の教育理念は、「自己実現を目指す医療人の育成」である。自己実現とは心理学者マズローの「自己実現理論」の中で提唱された5つの人間の基本的欲求のうち最も高次の欲求であり、自分らしさや自身がもつ可能性を最大限に発揮し社会貢献につなげることである。私は自己実現のことを「やりがい」と置き換えて教育に臨んでいる。自己実現のためには、在学中に繰り返し内省し、自己実現のイメージを構築すること、そして「自分にもできそうだ」という自己効力感を高めることで行動変容を促し、主体性のある行動をとり続けることが必要となる。特に自己効力感の醸成は自己実現において非常に重要な役割を果たすと考えられるが、学生に「自分はやればできる」という明確な根拠を与えなければならない。私は実務家教員として学生の成長過程をサポートし、自己効力感の根拠

となる「成功体験」を与えることで、自己実現を目指し生涯にわたり自己研鑽を続ける医療人を育成したい。

## 2) 理念をもつに至った背景

私はこれまでに認定実務実習指導薬剤師として薬学部実習生の受け入れを行ってきた。私は担当する実習生に必ず「薬剤師になったら何をしたいか？」を尋ねるようにしている。「給料が多くもらえるから調剤薬局に行きたい」などの経済的安定を求める学生の声は聞かれるものの、「将来薬剤師としてこんなことをしたい」という自己実現につながる声を聞くことはほとんどなかった。薬剤師として公衆衛生上の未解決課題を解決していくためには、さらに高次の欲求である自己実現を目標とすることが必要であると私は考える。なぜなら、自己実現を目標に掲げることで初めて「自らが置かれた環境における課題を探索し、未解決課題に対する解決策の提案や社会貢献など、主体的な行動につながる」と考えるからである。

薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年改訂版)では、「生涯にわたる自己研鑽により獲得が望まれる資質(A項目)」について言及されている。在学中に修得可能な資質には限りがあり、時代とともに社会的ニーズとの齟齬が生じる。薬剤師として最低限の専門的知識・技能の修得、そして生涯にわたる自己研鑽により社会的ニーズを満たす資質の修得を目指す「態度」を、どれだけ学生のうちに身につけさせることができるか。これが、私の教員としての使命感であり、上記の教育理念をもつに至った背景である。

## 3. 教育の方法・戦略

上記の教育理念を実現するために、私は自己効力感の醸成が最も重要であると考えている。自己効力感の醸成に必要な要素として、「成功体験」、他者の達成を観察することによる「代理経験」、自身の能力についてポジティブな言葉をかけられることによる「言語的説得」、生理的・感情的な変化を意識する「生理的情動的状态」の4つが挙げられている。私はこれらの要素に加えて「内省を促すこと」並びに「目的意識を持たせること」が自己効力感を醸成するために重要であると考え、教育に取り入れている。以下に私が実践している教育の方略を示す。

### 1) 授業の工夫

私は、自己効力感の醸成に対する有用性が指摘されているアクティブ・ラーニングを講義・実習で活用している。アクティブ・ラーニングは自己効力感を醸成する上で特に重要な「成功体験」を学生に与えることができる。一方で、ハードルの低い課題を与えて安易な成功体験を繰り返すと、自己効力感を高めることはできない。そこで私は、初見では解決が難しいと思われる課題に取り組ませる前に、まず類似する練習課題を教員が解決する過程を観察させることで「代理経験」を与える。次に、実際の課題に先ほどの問題解決の方略を適応させることで「成功体験」を与えるという手法を講義・実習に取り入れている。また、前述のA項目を意識させるために、学生の「成功体験」の後に、発展的学修事項として学生の成果物を教員として再構築することも必要に応じて実施している。学力分布が二極化しているクラスの授業においては、学力の低い学生を取り残さないために、学力が高い学生が物足りなくなってしまうことがある。上述の発展的学修事項を示すことは、そのようなクラスの講義・実習において、クラス全体の満足度を向上させる上でも有用であ

ると考えている。

また、(1)適宜学生の長所を伝えること(言語的説得)、(2)講義・実習の課題に取り組む際に目的意識を持たせること、(3)他者の意見に依存し、自分自身の意見がないような場合には内省を促すこと、などを繰り返すことで自己効力感の醸成を図っている。演習時間が長時間確保できる場合にはスモール・グループ・ディスカッション形式での実習を行い「内省」を促す。対話型のグループワークで得られる内省は自分1人での内省と異なり、他者の価値観が加わるため、新しい視野を獲得できるという利点があると考えている。

講義形式の授業では、集中力を高めるため、スライドのみに依存した一方向的な授業にならないよう工夫している。具体的には、板書を適宜取り入れることで思考過程を可視化し、患者指導用の外用薬デバイス(吸入器、自己注射デバイス等)の実物を供覧することで臨床実務との接続を意識させている。また、リアルタイムアンケートを授業中に実施し、学生の理解度を即時に把握するとともに、学生自身が能動的に授業に参加する機会を設けている。

## 2) 開発した教材

### 2-1)実務実習事前学習用ワークシート

「実務実習事前学習I」において、上述のアクティブ・ラーニングを実践するために問題解決の方略を模倣できるワークシートを開発した。ワークシートは「考えてみよう!」「実践してみよう!」という2つのセクションで構成されている。「考えてみよう!」では、練習課題と問題解決の方略を示し、教員が実際に問題解決する過程を学生に観察させることで「代理経験」を与える。次に「実践してみよう!」で先ほどの問題解決の方略を用いて本課題に取り組ませることで学生に「成功体験」を与えることを目的としている。

### 2-2)知識構成型ジグソー法実践のためのワークシート

学生の自己学修意欲を向上させることを目的として作成した。学生の自由な発想によるスモール・グループ・ディスカッションを促進し、互いに教えあうことで、「時間が過ぎるのが早く感じた」「いろいろな学生の勉強法・教え方を知ることが出来て勉強になった」などの感想を得た。また、演習後アンケートでは、知識構成型ジグソー法(アクティブ・ラーニング型教育)の導入により演習への満足度が向上することを確認した(第9回日本薬学教育学会大会で報告)。

### 2-3)自己学修支援ツール(S-ステップアップノート)

薬学共用試験(CBT)および薬剤師国家試験の出題範囲は広範であり、限られた演習時間の中で網羅することは困難であり、学生の自己学修の質に依存する部分が多い。また、学修習慣が定着していない学生にとっては、学修すべき内容が多すぎると感じてしまい、学修意欲が低下してしまう。この問題に対処するため、優先的に学修すべきSBOsと問題数を一覧表形式で示した「S-ステップアップノート」を作成し、学生に提供している。この自己学修支援ツールでは、学修に取り組んだ日付や正答率、時期別の学修量や正答率などが視覚的に確認できるように工夫している。そのため、学修の進捗状況が学生・教員ともに一目で確認できるというメリットがあり、学修モチベーション維持や、チューター面談等で活用されている。

## 2-4) 模擬試験復習ツール(学修方略内省シート)

CBT や薬剤師国家試験で利用される模擬試験は、受験時の学修定着度や合格に必要な点数を把握するために有用である。しかし、模擬試験で定着が不十分であった学修範囲は学生ごとに異なるため、クラス全体を対象とする演習ではフォローアップは困難である。また、知識が十分に定着していない問題の復習方法も学生ごとに異なり、設問の丸暗記など、望ましくない学修方略を取る学生が散見された。そこで、模試後に優先的に復習すべき SBOs と復習方法の質を個別に示すために、模試問題の復習用ツール(学修方略内省シート)を開発し、演習中の成績に基づき個別カルテを作成する方法を構築した。同シートは、学力が二極化するクラスにおいても、学力に応じた学修指針を示すことができるという点で有用であると考えている。

## 2-5) 講義資料

スライド資料および習熟度確認問題を作成して配布している。薬物治療学で教授すべき範囲は広範であり、講義資料だけでは学修の要点が理解できない恐れがある。別途、習熟度確認問題を配布することで、優先的に修得すべき内容を学生自身が把握し、効率的に学修を進められるようサポートしている。スライド資料には、授業中に口頭で説明した内容についても併せて記載することで、聴覚からの情報取得のみでは定着しにくい学生(視覚優位の学習特性を持つ学生)に対する配慮も行っている。

## 4. 学修成果

アクティブ・ラーニング実施前後に実施した習熟度確認テストにおいて、難易度が中等度以下の問題に関してはアクティブ・ラーニングにより十分な理解が得られたことを確認している。一方、難易度の高い問題について学生の自己学修だけでは十分な学修効果が得られないという課題も明らかになった。また、アクティブ・ラーニング型教育は、座学に比べて単位時間当たりに教授できる学修量が低くなる。そのため、別の教授方法と有機的に組み合わせて実践していくことが重要であると感じている。

## 5. 改善のための努力

講義で多くの学修事項を扱うため、講義速度が速くなってしまうのが自身の改善すべき点として挙げられる。講義内で扱う内容を概念化に必要な最低限の項目に厳選することで、講義速度をコントロールできるように工夫した。また、模擬試験の問題別正答率を確認し、担当科目学生の知識の定着が不十分である学修項目を把握し、授業に反映させるように努めている。

## 6. 今後の目標

### 1) 短期目標:学修方略内省シートの活用

学修方略内省シートを活用し、学生の学修方法最適化を支援する。

### 2) 長期目標:学修効果が得られる授業の構築

学生の主体的な学びを促し、薬剤師としての基本的資質を修得できるような講義を目指し、教授方法や講義資料の見直しを進める。